

プラトンにおける創造と場の問題

—『国家』から『ティマイオス』へ—

関村 誠

はじめに

プラトンは、後期の対話篇『ティマイオス』において独自の宇宙論を展開し、万有を作り出す「宇宙製作者」(δημιουργός)という神話的な存在を導入している。宇宙製作者は、知性の対象となり常に同一性を保つアイデア存在をモデルとして、万有を秩序づけることにより、宇宙を「似像」(εἰκῶν, 29b2)として製作したとされている。アイデアと感覚物との間の関係を、モデルと似像の関係として捉えることは、中期の著作でプラトンが提示し発展させたものであるが、それがここでも受け継がれている。ところが、感覚的な現れが生み出される様態について敏感なプラトンは、この『ティマイオス』の宇宙論において、さらに、感覚物が生成される「場」(χώρα, 52a8, コーラー)を問題化している。コーラーは、規範的アイデアと感覚物とに加えての「第三のもの」として、二元論的な思考枠組みを超え出る可能性を示唆する概念として注目される。この「場」は万有を生成させる「養い親」(τιθήνη, 49a6)とも呼ばれており、生成と消滅の場として提示されている。そこでは諸感覚物がアイデア存在から写し取られて生成するとされている。

しかし、『ティマイオス』の中では、この場において写し取られ創造される際の様態の詳細について、「表現しにくい驚くべき仕方」(τρόπον τινα δύσφραστον καὶ θαυμαστόν, 50c6)と述べられているものの、それ以上あまり明確には語られていない。この問題に関して、本稿では、この対話篇以前の、とりわけ中期の対話篇『国家』における議論との関連性に基いて考察していきたい。対話の構成上においても、『ティマイオス』は『国家』と緊密な関係を持っている。周知のように、『ティマイオス』の対話自体が『国家』での議論を不完全な仕方ではあるが振り返ることから始まっており、その内容を受け継ぐ側面を有している。しかし、ここでは、『ティマイオス』における『国家』の議論への直接の言及の検討ではなく、『ティマイオス』独自の思索展開の中に『国家』において発展させたものとのつながりを捉えていきたい。場や宇宙製作者の問題化の導入は『ティマイオス』にのみ特殊なものと言えるが、それらを準備するものはこの対話篇以前にプラトン思想の発展の中で育まれていたように思われる。それを捉え直すことによって、逆に『ティマイオス』における創造行為と場の理解に有効な手がかりを見いだすことができるであろう。とくに、教育論や哲学者論の中に、宇宙製作者の創造行為とコーラー的な場の介在の機能を準備する動態のシステムを見だし、それとの比較検討を試みることによって、プラトンの思索展開の中でコーラー概念が導入されるに至った理由の一端を捉えていくことにつとめる。

本稿ではまず、『国家』における、アイデアと感覚物を関係づける模倣行為や創造行為において、モデルとの緊密な類似関係を保持する現れとしての「似像」が、「尺度」(μέτρον)の概念の介入をともなう問題とされていることを確認し、また教育論において、「刻印」(τύπος, テュポス)という概念の用法に着目しつつ、教育

される者の作品受容から能動的模倣行為への展開を追う。次に、この機能が国家支配者としての哲学者の行為において、アイデアとの関わりで感覚物を捉えて秩序づけていく創造活動に受け継がれていくことを明らかにしたい。これらの考察においては「職人」(δημιουργός)の位置づけに留意していく。『国家』における「職人」は『ティマイオス』の神話的存在である「宇宙製作者」とはまったく異なったレベルで使用されているが、同じ δημιουργόςであり、プラトンの創造行為に関する思索発展における関連性をそこに見ることができるように思われるからである。さらに『国家』のテュポスの機能が『ティマイオス』のコーラーの機能にいかんか発展し受け継がれ、組み込まれているかを明らかにしていきたい。その結果、創造と場にかかわるプラトン思想の動態の一端を捉えることができるであろう。

1. 『国家』における職人原理とムーンケー教育

『国家』における理想国家建設の作業の中での将来の守護者になるべき者の教育論に関しての議論を見ていく。ここでは、まず議論の出発点として正義がいかなるものであるかが問われ、個人の正義よりも「いっそう大きくて学びやすい」(368e6-7)と言われる国家における正義を探究するために、対話の中で国家建設が遂行される。その中で、国家の守護者、また国家の統治者たるべき哲学者が問題化されていく。国家の形成過程についての説明は、他の対話篇にも見られる¹が、それらとは異なって『国家』において特徴的なことは、「必要」が国家の作られる要因とみなされて、初期国家の構成員がさまざまな職人たちと農夫で占められており、生産あるいは製作する仕事に携わる活動を基礎にしていることである。じっさい、国家のはじまりには農夫、大工、織物工、靴作りなどの4、5人が挙げられ、さらに国家が拡大するにつれてさまざまな「職人」(δημιουργοί)が加えられていく。その際に、人間はそれぞれ「自然本来の素質」としてのフュシス(φύσις)において異なっており、それにあった「仕事」(ἔργον)をするのがふさわしいとされて、さらに次のようにまとめられている。

以上のことから考えると、それぞれの仕事は、一人の人間が自然本来の素質に合った(κατὰ φύσιν)一つのこと(ἓν)を、正しい時機に(ἐν καιρῷ)、他のさまざまなことから解放されて行なう場合にこそ、より多く、より立派に、より容易になされることになる。(370c3-5)²

この国家成員のあり方の原理的説明は、『国家』においてさらに続いていく理想国家建設の過程において、重要な意味を持ち、以後の議論の中でたびたび振り返ってこの原則が確認されることになる³。この原則の提示をジュリア・アンナスは、専門に仕事が多分化されている点を見て「専門原則」the Principle of Specializationと呼んでいる⁴。しかし、それはとりわけ職人の製作活動を基盤と

したものであり、本稿においては「職人原則」と呼ぶことにする。この国家の形成過程についての議論の中で、その構成員として戦士さらには守護者が付け加えられていく時、職人ではない彼らのあり方にも職人原則が応用されている(373e-374e)。

プラトンは、『国家』の議論を進めていく際に、職人行為や視覚造形に関わる概念をしばしば介入させてそれに依拠している。このことに留意しつつ、『国家』第二巻と第三巻における、将来国家の守護者となるべき者の教育に関わる議論の展開を見ていく。ここでは、子どもの頃からのムーシケー(音楽文芸)による教育の重要性が説かれ、詩人によって作られた良き物語(ミュートス)だけを受け入れて「育ての親や母親たち」(τροφούς τε καὶ μητέρας)が子どもに語り聞かせることで子どもの魂を形成していくべきことが議論されている。教育とは、物語によって子どもの魂を「造型すること」(πλάττειν)であるとされる(377c)。ここでは同じ『国家』の中での第十巻の詩人に対する厳しい見方とは異なって、規範に適った内容の作品を作る限りにおいて詩人の仕事は積極的に認められている。詩人の作品はその中に神や人物の有り様を現れとして含んでおり、それが教育される者に受容されることが魂の教育として捉えられている。そして、受容される作品は、教育論において、「似像」(εἰκόνας, 402c6)として捉え直されていくことになる。

ここで、現れについてのプラトンの理論を一瞥して εἰκών という語の持つ意味について確認しておきたい。というのも『国家』では「似像」が現れの受容や創造に関わる議論に組み込まれているが、『ティマイオス』においても宇宙は「似像」(εἶ)れたとされており、この「似像」についてある一貫した立場をプラトンに見ることができるように思われるからである。

現れの中での「似像」の位置づけを明確に定義づけようとしているのは『ソフィスト』における議論(235b-236c)である。そこで、プラトンは「似像」(εἰκών)と「虚像」(φάντασμα)とを区別している。「似像」とは、受容者がこの像とモデルとの関係を把握し、モデルのもつ「釣り合い」(συμμετρία)と合致したかたちで作られる像であり、これに対して、「虚像」とはモデルの釣り合いと像の釣り合いが異なっているとされる。このように「似像」と「虚像」との区別において重要なのが「尺度」の概念である。ここで尺度をもった関係は、同レベルのものの中にあるのみではなく、イメージとモデルとの間にあることに注意する必要がある。この「似像」はそれを見る者が、イメージとモデル、さらには感覚物とアイデアとの尺度をもった関係の把握を前提としているのに対して、「虚像」を見る者は、目の前の現れに対峙してその現れの根拠を把握することができず、現れを本物と取り違えてしまうことになる。教育論とは異なって詩人が厳しく非難される『国家』第十巻の議論では、詩人が作り出す現れについては「似像」という語は使われず、「虚像」あるいは他の表現が用いられている⁵。『国家』のなかでも詩人批判とは異なる文脈における「似像」をめぐる創造性を追

っていく。

『国家』の教育論において、似像の受容と創造との有り様を把握していくために、テュポス(τύπος)という語のプラトンによる用法に着目したい⁶。このテュポスは、「刻印、型」という意味をもつが、子どもの魂の育成において原理的役割を担っている⁷。この概念は、『国家』の教育論という限られた文脈の中で様々なレベルで使用されている。教育論の前半(第二巻)では、子どもによるミュートスの受容と詩人によるミュートスの創作行為が問題となるが、そこでは、テュポスが三つの異なったレベルで機能している。テュポスは、まず第一に、粘土のように柔らかく可塑性をもった子どもの魂に物語受容によって付けられる型として⁸言及される。第二には、受容される物語作品のもつ型としてのテュポス⁹、また第三には、詩人がそれに従って物語を作るべきであるとされる規範としてのテュポスに¹⁰言及されている。そして、規範的なテュポスの内容としては、物語の中で語られる人物とくに神々のあり方が、模範となるすぐれて善いものであること、変化や偽りによってわれわれを迷わすようなものではないこと、が同意される。これらの三つのレベルでのテュポスは、互いに連係して、規範に従っての像の創造と、規範とのつながりをもった似像の受容とを可能にさせる原理として働いている。教育論におけるテュポスは、ポリス国家全体のレベルと個人レベルとをつないで、詩人の物語創作と子どもの物語受容とを密接に関係づける役割を果たしている。

さらに教育論が進むにつれて、はじめは受動的な幼い子どもの魂を対象としていた議論が、教育を受ける者の魂の能動性の獲得を前提とした議論となってくる。その中で、「語り」におけるミーメーシス(模倣)の問題が詩人の行為だけではなく、詩人の作品を受容する者の行為の積極的な側面についての議論にも組み込まれてくる(394e-)。ここでは、詩人が作中人物の言葉を真似するという詩人の創造活動の局面で捉えられていたミーメーシスが、作品を受容する者が作中人物の役を真似てその人物に同化するという意味をもつように、局面がずらされてくる¹¹。この守護者の側のミーメーシスが問題化される際に、その活動を基礎づけるものとして先にみた「職人原則」が振り返って確認されている。

それでは、アデイマントス、このことを考えてくれたまえ。つまりそれは、われわれの国の守護者たちは真似の達人な人間(μιμητικούς)であるべきかどうか、という問題だ。はたしてこのこともやはり、先の原則に従って考えられるものだろうか? ……〈真似〉について(περὶ μιμήσεως)も同じ道理で、同じ一人の人間がたくさんのものを真似しようとしても、ただ一つのことを真似するようには、うまくできないのではないかね?(394e1-9)

さらにこれに続けて、守護者が「職人」(δημιουργός, 395c1)であるとも述べられている。また、ムーシケーによって教育されて、

対象の限定されたミーメシスの働きを駆動していくことのできる者を、プラトンは「適切な性格の人」(μέτριος ἀνὴρ, 396c5) という尺度の概念を孕んだ表現で捉えている¹²。似像とモデルとの関係、すなわち、現れとその現れの源との釣り合いの関係としての尺度を捉えることができ、したがって、現れに自己同化していくミーメシスを実行できる人が μέτριος ἀνὴρ であると言える。こうしたミーメシスをも含めた能動性の方向づけをなす原理としてテュポス概念が用いられ、それは「型(=テュポス)に自分をはめこんで形づくる」とも表現されている(396e)¹³。「先原則」とは、先に引用した 370c3-5 の箇所を指しており、「職人原則」に適った仕方テュポスが機能している。テュポス自体が尺度に適った関係へと導いていく働きをもっており、はじめに受動的に魂内に受け入れていたテュポスと合致する規範的なテュポスに能動的に従っていく者が、μέτριος ἀνὴρ という表現で捉えられていることが理解できる。このミーメシスは、『国家』第十巻で批判されている見かけを作り出す働きとは異なり、似像の受容からはじまってそのモデルへと遡っていく方向づけをもっている。物語の中の人物のあり方に自分のあり方を同化させていく働きとしてのミーメシスである。このように、テュポスは、モデルに適った像の創造とその受容、さらにはこの受容からモデルへと遡っていくミーメシスをつなぐ動態を形成して、教育論における魂の形成における原理的役割を担っている¹⁴。

この教育論の結論部分では、教育の目的は最終的に、詩人が作る物語の中の似像だけではなく、教育される者が受容すべき似像全般に拡張されて、さまざまな職人たちの作るものも含めたところでの像受容に求められている。

それではわれわれは、ただ詩人たちだけを監督して、すぐれた品性の似像(τὴν τοῦ ἀγαθοῦ εἰκόνα ἦθους)を作品の中に作りこむようにさせ、さもなければ、われわれのところで詩を作ることを許さずにおけばよいのだろうか？ それともむしろ、他のさまざまな職人たち(δημιουργοῖς)をも同じように監督して、問題の悪しき品性や放埒さや下賤さやみぐるしさを、生きものの似像のうちにも、建築物のうちにも、そのほかどのような制作物のうちにも作りこまないように禁止し、それを守ることのできない者は、われわれのところでそうした制作の仕事をするのを許さないようにすべきだろうか？……(401b1-8)

このように言われた後で「われわれの探し求めるべき」職人は、作品が若者たちに良い影響を与えていくような職人であるべきだとされている(401c)。このように、職人的な創造が教育論の目的に重要な要素として取り込まれている。そのうえで、『国家』の教育論は、教育された者が一般に作り出された「似像」とそのモデルとの関係を把握できるようになることであると言われている(402c)¹⁵。守護者になるべき者の教育は、詩人あるいは職人が作る「似像」をそ

のモデルの存在とともに認識していくための訓練であると言える。そして、この守護者自身が「職人」(δημιουργός)と呼ばれていることも先にみた。これは、守護者になるべき者の教育の段階というよりも、守護者になってからのことを先取りしてのことと思われる。この守護者の創造活動については、哲学者のあり方とともに見ていく必要がある。

2. 哲学者のミーメシスと創造活動

『国家』の対話の流れにおいては、第二・三巻で展開された教育を受けて守護者となる人たちのうちから国家統治をする者がでてくるが、それが哲学者でなければならぬと主張される、いわゆる哲人王の思想が提示される(473c-e)。守護者となるべき者の教育論における似像の受容やテュポスの機能が、哲学者の議論にどのように受け継がれているかをみていこう。第五巻から第六巻にかけて哲学者の本性について議論される。そこでは、まず、哲学者が「真実を観ることを愛する人」(τοὺς τῆς ἀληθείας φιλοθεάμονας, 475e4)であるとされ、現れをそのまま実物と思いを違えて捉えてしまう人と対比されている。例えば美の認識に関して、哲学者は、「〈美〉そのものが確在することを信じ、それ自体とそれを分けもっているものとを、ともに観てとる能力をもっていて、分けもっているもののほうを、元のもの自体であると考えたり、逆に元のもの自体を、それを分けもっているものであると考えたりしないような人」(476c9-d3)であるとされる。感覚で捉えられる事物をアイデアの似像であるのみならずとることができるのが哲学者であると言える。

このような仕方感覚物とアイデアとの関係を捉えることのできる哲学者の行為として、真実在としてのアイデアへと方向付けられたミーメシスが問題化される。ソクラテスは言う。

彼(哲学者)は、整然として恒常不変のあり方を保つ存在にこそ目を向け、それらが互いに不正をおかしおかされることなく、すべて秩序と理法に従うのを観照しつつ、それらの存在にみずからを似せよう、できるだけ同化しようとする(μιμῆσθαι τε καὶ ὅτι μάλιστα ἀφομοιοῦσθαι)ことに、時を過すだろう。——そもそも、人が尊崇の気持ちをもって何ものかと共に生きる時、そのものを真似(μιμῆσθαι)しないでいられると思うかね？(500c2-7)

このミーメシスの結果、「哲学者は、神的にして秩序あるものと共に生きるものであるから、人間に可能なかぎり神的で秩序ある人(κόσμιός τε καὶ θεῖος)となる」(500c9-d1)とされる。このアイデア存在と哲学者の関係については、哲学者における「真実在に触れること(ἐφάπτεσθαι)がその本来の機能であるような魂の部分」は真実在と「同族関係」(συγγενεῖ)にある(490b4)部分でもであるとされている。また、哲学者の自然的素質は、アイデア存在と「親近性をもつ」(οἰκείαν, 501d4)ことが示唆されている。このように、

アイデア存在自体のあり方と哲学者の魂のあり方とは、重なっているものとみなされており、アイデアへの同化としての哲学的ミーメシスの根拠ともなっている。

さらに、哲学者の自然的素質に関わる議論において、尺度の観点を取り入れられている。哲学者の自然的素質とは反対に「無教養でみぐるしい(ἀμούσου τε καὶ ἀσχήμονος) 自然的素質である場合、それが引っぱって行く先は〈度はずれ〉(ἀμετρίαν) ということにほかならない」とされた上で、「しかるに真理とは、〈度に適う〉ことと〈度を失する〉こととの、どちらと同族の関係にあると考えるかね?(ἀλήθειαν δ' ἀμετρία ἤγη συγγενή εἶναι ἢ ἔμμετρία;)」と、ソクラテスによって問われ、真理が〈度に適う〉こと(ἔμμετρία)と同族の関係にあることが確認されている(486d4-10)。そして、哲学者の精神は、その素質において、「優雅さ」をそなえているとともに、アイデアとの関係において〈度に適った〉ものでなければならないとされている。

ここで、「無教養でみぐるしい」ことは、ムーシケーの教育によって克服されるべきことであり、そのことは第三巻で述べられている。「無教養(ἀμούσος)とはムーシケーの教育がなされていないことをそのまま表わしており、第三巻でも、ムーシケーに関する探究心のない者は「言論嫌い(μισόλογος)で「無教養(ἀμούσος)の人間(411d 7)となるとされている。また、教育論の文脈においては教育の効果に適った「優美さ(εὐσχημοσύνη)に對立するものとして「みぐるしさ(ἀσχημοσύνη)が提示されており(401a5)、「みぐるしい」ことは、やはりムーシケーの教育を受けていない魂の状態に対応する概念とみなすことができる。ムーシケー教育が哲学者の素質に入り込んでいることがわかる。

また、哲学者と関係づけられた尺度の概念は、先にみた、教育された者が μέτριος ἄνθρωπος という表現で捉えられていることとの関連で理解することができよう。ムーシケーの教育を十分に受けた者が、似像をモデルとの関係の尺度に適った仕方では把握することができたのと同じように、哲学者もアイデア存在とそれを分有した感覚物の関係を尺度をもって把握できると言える。

もちろん、哲学者である限りの特殊な活動はムーシケーの教育のみでは理解することはできない。哲学者独自の教育プログラムも『国家』では説明されている。しかし、哲学者論と守護者になるべき者の教育論に共通する概念構成をみて、哲学者論は、国家の守護者となるべき者に対しての教育の内容を基盤とした上で成立していることが理解できるであろう。

ムーシケーによる教育論においては、モデルに適った像の創造とその受容、さらにはこの受容からもとのモデルへと遡っていくミーメシスをつなぐ動態を形成して、魂の形成における原理的役割を担っているのがテュポスであるとされた。しかし、哲学者の活動に関わる議論においてはテュポスという概念は用いられてはいない。

教育論ではすぐれた規範に同化していくミーメシスによって自らすぐれた者となっていくことが主眼であった。ソクラテスは、教育論の締めくくりとして、「ムーシケー(音楽・文芸)のことは、その終局点として、美しいものへの恋に関すること(τὰ τοῦ καλοῦ ἐρωτικά)で終わらなければならない」(403c6-7)と述べている。エロースとは『饗宴』において論じられ、そこではエロースは哲学者としての側面が強調されている¹⁶。教育論のミーメシスは哲学者にとってはアイデア観照に至るミーメシス受け継がれている。教育論においては、創造活動をする詩人と作品を受容して教育される者は別々であり、それぞれの活動においてテュポスが作用していた。しかし、教育される者の行なうミーメシスのさらなる発展として捉えられる哲学者のミーメシスは、さらに哲学者自身の創造活動に接続していくことになる。

哲学者の活動に関して、ソクラテスは次のように言う。

もし哲学者が、そのように自己自身を形づくることにとどまらず(μὴ μόνον ἑαυτὸν πλάττειν)、真実在の世界において目にするものを人間たちの品性のなかに——私的にも公的にも——つくりこむという仕事を、ひとつの強制的な義務として課せられるとしたならば、はたして彼は、〈節度〉や〈正義〉その他、民衆がもちうるすべての徳の拙劣な職人(δημιουργόν)となるだろうと思うかね?(500d4-8)

ここでは、「自己自身を形づくる(πλάττειν) こと」は、教育論における魂の造形を基盤としてのミーメシスをアイデアの認識にまで到達させることを表わしているともみなすことができる。しかし、哲学者の活動はそれに「とどまらない」。アイデアを認識してそこへと自己を同化させるだけではなく、そこから折り返して、感覚世界の中の物事を作り形成していく創造活動にはいつていく。哲人王の国家統治でもある。『国家』第七巻の有名ないわゆる「洞窟の比喩」の文脈において、洞窟の外に出て真実の光を見たものが、そこに留まるのではなく強制的にもう一度洞窟の中に降りていって、洞窟内の囚人たちの指導にあたるという、アイデアへと上昇してそこに触れた後に感覚物に再びたずさわることが示されているが、哲学者の活動はこの動きに相当するものと言える。

またここで注目すべきは、哲学者が人間の品性や徳を作る「職人(δημιουργός)として捉えられていることである。アイデアに適った具体的な品性のあり方という限定された者だけを作るというこの職人への言及は、国家建設の始めに国家構成員に対して提示された「職人原則」がここでも効いていると見ることもできるだろう。

さらに、哲学者の国家の指導者としてのこの創造活動は、画家の制作に喩えて表現されている。ムーシケーによる教育の文脈においても、プラトンは造形的な要素を取り入れて魂の形成について議論を展開しており、その中でテュポスという造形的・視覚的な概念が導入されていたが、哲学者に関してもその活動が造形的な

概念に依拠しつつ説明付けられている。例えば、国の指導者としての哲学者は「盲目であるべきかそれとも強い視力をもっているべきか」ということを問題化して、ソクラテスは対話相手のグラウコンに対して次のように問う。

これから述べるような人々は、盲人といささかでも違ったところがあると思うかね——すなわち、それぞれの真実在の認識をまったく欠いていて、魂のなかに何ひとつ明確な範型(παράδειγμα) というものをもっていない人々、そしてちょうど画家がするように、もっとも真実なものへと目を向けて、つねにそれと関連させ、できるだけ正確にそれを観るというやり方で、美・正・善についてのこの世の法も、制定する必要があるれば制定し、あるいは現存の法を守護し保全する、ということができないような人々は？(484c6-d3)

もちろんここで哲学者は盲人ではないことが同意される。さらに、哲人王の説を画家の制作に喩えて言い換えて、ソクラテスは次のように言う。

神的な模範(範型)を用いて描く画家たち(οἱ τῶν θεῶν παραδείγματι χρώμενοι ζωγράφοι)が一国の輪郭をかたどるのでもなければ、国家はけっして幸せになることはできないだろう。(500e3-4)

ここで、導入されている範型(παράδειγμα, パラダイグマ)という概念に着目したい。パラダイグマは、アイデアの認識とアイデアに適った感覚の世界の統治と創造とにおいて、アイデアとそれを分有する感覚物をつなぐ原理的な働きをしている。哲学者のミーメシスと同じ哲学者のポイエシスという逆方向ではあるが同様にモデルと似像とを関係づける活動を基礎づけている原理である。このパラダイグマは、ムーシケーの教育論においてみられたテュポスに相当するものがより形而上学的に哲学者独自の活動に応用されたものとも言える¹⁷。テュポスもまた、モデルとイメージをつなぐ原理として、詩人のポイエシスや教育を受けるものの同化的ミーメシスを方向付けるものであった。ただ、テュポスが、ポイエシスとミーメシスを別々の局面で別々の動作主に帰属させてそれらを結びつけているのに対して、パラダイグマは同じ哲学者において、感覚物からアイデアの方向とアイデアから感覚物への両方向を定めるものとなっている。

このように、哲学者は、国家の中にアイデアとの尺度に
をもつ人間品性を実現していくという創造活動に従事する者として
みることができる。

3. テュポスからコーラーへ

ここまで、モデルとの尺
『ティマイオス』のテーマに通じる面を『国家』において考察してき

た。では、『国家』において見られたテュポスやパラダイグマに相当する機能は、『ティマイオス』における宇宙製作者の宇宙の創造活動において見いだすことができるであろうか？ この問題の考察のために、『国家』にみられた特色を振り返りつつ、『ティマイオス』における「コーラー」とそこにかかわる「尺度」の概念についてさらに分析検討していく。

『国家』においてテュポスやパラダイグマの創造に関与していた。確かに、コーラーをテュポスあるいはパラダイグマと同一視することはできない。コーラーは「捉えどころのない厄介な種類のもの」(49a)と言われているが、テュポスは、そのつど特定のレベルに現れて一定の方向を定める機能をもっていた。しかしながら、われわれが『国家』においてみたまざまなレベルで働きつつ互いに関係し合っ一連となって国家の中で働くテュポスの機能が、より流動性をもった全体的な仕方でも『ティマイオス』におけるコーラーにおいて働いているとみなすことはできないであろうか？ このような見通しのもとで、さらに『ティマイオス』をみていくことにする。

まず、テュポスの概念自体が、『ティマイオス』のコーラーについての議論のなかに見出すことができることを指摘しておくべきだろう。コーラーがいかなる仕方でもアイデアや感覚物とかかわるのかという点に関して、次のように述べられている。

そのもの[コーラー]は、いつでも、ありとあらゆるものを受け入れながら、また、そこへ入ってくるどんなものに似た姿をも、どのようにしてもけっして帯びていないのです。というのは、そのものは元来、すべてのものの印影の刻まれる地の台(ἐκμαγέϊον)をなし、入ってくるものによって、動かされたり、さまざまに形をとったりしているものなので、このようにして入ってくるもののために、時によっていろいろと違った外観を呈しているというわけだからです。——しかし、そこへ入って来たり、そこから出て行ったりするもののほうは、これは「常にあるもの」(＝理性対象)の模造(μιμήματα)なので、そこから、一種の、表現しにくい、驚くべき仕方でも写し取られた(τυπωθέντα)ものなのです。しかし、それがどうい
う仕方でもかという点については、またの機会に追究すること
にしましょう。(50b8-c6)

このように述べた上で、感覚の対象である生成されたものとその生成のモデルとしての知性的対象であるアイデア存在とは異なった「第三の種類」としてコーラーが把握し直される。またアイデアが父であり、感覚物が子であるならば、受け入れて生成する場としてのコーラーは母であるとされる¹⁸。それに続けて次のように言われる。

さらに注意しなければならないのは、この場合、かたどられて
つくられる像(ἐκτυπώματος)が見た目にありとあらゆる多様

性を呈しななければならないことになっているのだとすると、その中でそういう像がかたどられて (ἐκτυπούμενον) 成立するところの、その当のもの (受容者) 自身は、およそ自分がどこから受け入れるはずのどんな姿とも無縁だというのでなければ、受け容れるものとしての準備がよく整っていることにはならない。(50d4-e1)

ここでは、τυπωθέντα, ἐκτυπώματος, ἐκτυπούμενον というテュポス概念を孕んだ語の使用と、また、生成されたものとアイデアとの間のミーメシスによって結びついた関係に対する示唆とによって、アイデアの模倣像が入ってきたり出て行ったりするときに、テュポスによって律せられるつながりが示唆されている。『国家』においてテュポスという語が、社会規範、作品内容および作品を受容する者の魂の三つのレベルで用いられて、それらをつなぐ創造と受容の力動性を形成していたが、『ティマイオス』においては、コーラーにおける感覚物の生成の動態の表現にテュポス概念が組み込まれている。

さらに、ここで、「あらゆるもの」(τὰ πάντα) を受け入れる「地の台」としての ἐκμαγεῖον (50c2) というコーラーを示す表現に着目してみると、プラトンの別の対話篇『テアイテトス』においてテュポスとの関連でこの表現が用いられていることが想起される。この対話篇においてプラトンは ἐκμαγεῖον という語を柔らかな魂の可塑性を示すために用いている。そこでは、われわれの魂が「軋のかたまり」(κῆρινον ἐκμαγεῖον, 191c9) とみなされて、このかたまりの上に感覚や思いなどを「刻印する」(ἀποτυπούσθαι, 191d6) ことでテュポス (τύπον, 192a4) を魂のなかの保持することが記憶であるとされる。ここではまた、記憶について、ムーサイたちの母がムネーモシュネーであることが述べられてからこのテュポス概念が導入されており、『国家』の教育論におけるテュポスの議論に呼応している。

次に、『国家』のテュポスやパラダイグマの議論において重要な要素であった「尺度」の概念と『ティマイオス』との関係についてみていく。『ティマイオス』においても、宇宙製作者の活動とその作品とに尺度の概念が介入してくる。宇宙を作り上げている材料に関して、火・水・土・空気の四つの要素があげられており、それらが「互いに、できるだけ比例するように仕上げられた」(32b) とされている。これら四つの要素について、次のように述べられる。

宇宙の生まれる前には、これらすべてのものはまだ比率も尺度もない状態に (ἀλόγως καὶ ἀμέτρως) あったのです。そして、万有の秩序づけ(κοσμίεσθαι τὸ πᾶν) が試みられた時、最初は、火・水・土・空気は、なるほど何かそれ自身の、一種の痕跡を持ってはいましたが、しかしまったくのところ、何ものたりとも神不在の場合にはさぞやかくあらんというようなありさまだったので、その頃はこれらのものはもともと、まさにいま述べたような状態にあったわけですが、これを神がはじめて、

形と数を用いて形づくったというしだいなのです。(53a7-b5)

まったくのカオスの状態にあった火・水・土・空気の四つの要素が、ここでは「神」と呼ばれる宇宙製作者による創造の介入によって、秩序づけられ「尺度」を有するようになったのである。この宇宙の尺度の成立する場がコーラーとして捉えられている。このコーラーの秩序づけの働きは穀物の不純物などを揺さぶり動かして取り除く道具である「箕」(πλόκωνον, 52e6) に喩えられている。コーラーにおける生成の働きの前には、宇宙の材料となるものが「比率も尺度もない」状態であったが、この揺さぶりの動きによって振動を与えられて「相互に最も似ていないものをお互いから最も大きく引き離し、また最もよく似ているもの同士を最大限に同じところに押しやる」ことになって秩序づけられて宇宙が生まれたとされる。

創造される宇宙に尺度をもたせて秩序づけるコーラーの機能は、『国家』にみたテュポスやパラダイグマに従ったミーメシスやポイエシスなどのモデルとその似像とを緊密に結びつける機能を基盤にしているとみなすことができるだろう。また、『ティマイオス』において、宇宙製作者の仕事は、事物を無秩序な状態から「比率のある、釣り合いのとれたもの」にしていくことにあり、この比率や釣り合いが、「この事物の自分自身との関係においても、お互い同士の関係においても成り立つようにした」(69b) と述べられているように、創造行為を行なう者自身がこの尺度をもった関係に組み込まれることが表明されている。このこともまた、『国家』における守護者や哲学者の模倣行為や創造行為にも見ることができると言える。

先にみたコーラーについての引用のなかで、この場においては創成される感覚物はアイデア存在から「一種の、表現しにくい、驚くべき仕方です写し取られた (τυπωθέντα) ものなのです」とテュポス概念を孕んだ言い回しでコーラーにおける創造の特殊性が主張され、すぐに続けて、「しかし、それがどのような仕方かという点については、またの機会に追究することにしましょう」(50c) とされていた。この「またの機会」に『ティマイオス』におけるテュポス概念を孕んだコーラーでの創造のあり方の詳細が語られるはずであることが示されている。しかしながら、この「機会」については、これまで研究者たちが検討してきているように¹⁹、それにあたる箇所は特定できず、『ティマイオス』のなかでは、さらなる追究は見られないとみるべきである。そうであるならば、またそこにテュポスという概念が関わり、さらには他の点でも『ティマイオス』が『国家』の議論を受けて成り立っているという事実から、この写し取る「仕方」の内実を『ティマイオス』以前のプラトンの『国家』における思索の発展に遡って考察していくことが許されるであろう。

以上の考察をさらに補強するために、『ティマイオス』の締めくくりにおける宇宙論の結論にあたる部分での、魂と身体の関係、そして人間と宇宙との関係についての議論をみていく。人間の魂と身

体の関係の議論において尺度あるいは釣り合いの概念が再び導入されている。美しくまた善いものは「釣り合いの取れた」(σύμμετρον)あり方をしていなければならないとされ、「健康と病気」、「徳と悪」を考える時には、魂と身体との間の釣り合いと不釣り合いが最も重要な意味をもつと言われる(87c-d)。ここで、人間を魂と身体との合成体とみて、両者が尺度に適ったあり方をするとともに美を見ることがあるという考えは、宇宙をその素材とそれを統率する魂(理性をもつ)との合成体としてみて、宇宙が生成する場であるコーラーにおいて素材に秩序が与えられるという考えとパラレルに捉えられている。これは『国家』における個人と国家がパラレルに捉えられていたことに通じるものでもある。

また、プラトンは魂と身体が尺度に適った関係をもつべきことを主張する際に、『国家』の教育論を示唆している。魂も身体も病の状態にしないためには、魂と身体がどちらかに偏ることなく双方の均衡がとれているべきで、精神面の活動に従事している人は体育にも親しむべきであるとした上で、次のように述べられる。

今度はまた、身体づくりに気を配っている人は、それに対抗するものとして、音楽・文芸(ムーシケー)やひろく哲学全体にも(μουσικῆ καὶ πάσῃ φιλοσοφίᾳ) たずさわって、魂にも、それに応じた運動を与えてやらなければなりません。——もしも、人が正しい意味で「美しく、同時にまた善い人(=立派な人)」と呼ばれるに値するものであろうとするなら。そしてまた、(身体)の諸部分についてもやはり、これと同じ方針に従い、万有の姿を模写する(τὸ τοῦ παντὸς ἀπομιμούμενον εἶδος) という仕方、その世話をしなければならないのです。(88c3-d1)

『ティマイオス』において宇宙とパラレルな関係にある人間は、『国家』における守護者になるべくムーシケーの教育を受けた者や哲学者の尺度に適った生き方を受け継いでいると言える。こうして、人間個人もまた、宇宙製作者によって創造された宇宙との類似関係をもつべきとされている。

したがって、この『ティマイオス』の結論部分で、さらに再びコーラーに言及されて、それとのミーメシス行為を含めた関係で人間個人の身体の浄化のあり方が議論されていることは違和感なく理解できる。

もしも、人が、あの、万有の育ての親とか養い親(τροφὸν καὶ τιθήνην τοῦ παντὸς)とかいうように、われわれの呼んでいたところのものを模倣し(μιμήται)、身体を、できるだけどんな場合にも、じっとしたままにはさせておかないで、むしろこれを動かし、そして、その中に絶えず一定の振動をつくり出すことによって、自然に適った仕方、かの内外の動きから、終始、自分の身を守るなら、そしてまた、同族関係に従って彷徨って

いる、身体のいろいろな性質や部分を、適度に[=尺度に適った仕方] ゆさぶることによって(μετρίως σείων)、あの、万有についてわれわれが語っていた、以前の話の通りに、相互に秩序づけて、一定の配置におくなら、そのような人にとっては、これらの性質や部分は、(もはや) 敵同士が相並んで置かれて、身体の中に戦争や病気を生み出すがままに放置しておかれることはなくなるでしょうし、むしろ、親しい間柄のものの同士で隣り合わせになるように置かれて、健康をつくり出すようにさせられることになるでしょう。(88d6-89a1)

ここでは、コーラーを真似すること、すなわち、コーラーに対するミーメシス行為が、人間が自分自身を秩序づけることであるとされ、人間と宇宙とは同じ尺度に適った存在であるべきという考えが示されていると見ることができる。先に「ふるい」の道具に喩えられたコーラーの働きを見たが、ここでもコーラー独自の揺さぶり運動による秩序づけが強調されている。

またここでは、「万有の育ての親とか養い親とかいうように、われわれの呼んでいたところのもの」とは、もちろんコーラーを指しているのは明らかである。じっさい「養い親」(τιθήνη)という語はプラトンの全著作で三回のみ使用されているがこの箇所以外の二カ所はいずれも同じ『ティマイオス』の先にみたコーラーを説明する文脈である。しかしながら、「育ての親」(τροφός)は、厳密にはコーラーを説明する文脈では使用されていない。けれども、これについては、これまでの『国家』と『ティマイオス』との間のつながりに関する考察から、本稿のはじめに見た『国家』の教育論において「育ての親(保姆)や母たち」(τροφούς τε καὶ μητέρας)が、詩人の作品を子どもたちへと媒介させる働きをするべきだということがテュポス概念の提示とともに言われていたこととの関連で、この『ティマイオス』の末尾に近い文でコーラーを「育ての親と呼んでいた」と言及されていることを理解することができるのではないだろうか? やはり「母」とも言われるコーラーは宇宙製作者の仕事に媒介する機能をもっているが、そこに至るまでの発展の起点に『国家』における子どもたちの魂の造型活動を見ることができるようになる。

結び

これまでの考察から、守護者になるべき者に見られた、受動から能動へと転換させて同化的なミーメシスを駆動させていくシステムは、テュポスが原理的な働きをして、規範的なものとの尺度ある関係をもたらし、それが職人としての守護者の創造的仕事に通じていることが、これまでの考察から理解できた。このシステムが、哲学者、さらには宇宙製作者の働きの内実へと発展してきているとみなすことができるであろう。

アリストテレスは『自然学』第四巻において、プラトン『ティマイ

オス』のコーラーを取り上げて、それは「質料」(ύλη)と同じものであり、また、アイデアを「分有するもの」であると述べている。これまでの考察から、このアリストテレスの見方は、プラトンがコーラーに込めた意味を捉え損ねていると言えるのではないだろうか。プラトンのコーラーは素材的側面もつが、尺度をもった秩序づけという創造の媒介作用の動的な側面をぬきにして把握することはできないであろう。

これまで、『国家』と『ティマイオス』との間のつながりや共通性を見てきた。しかしもちろん両対話篇の議論には大きな違いもある。『国家』では、正義とは何かとい問を出発点として、国家建設の議論がはじまり、統率力の養成と国家における哲学者によるその行使の必然性が強調される。したがって、特に魂の能力に関する議論が展開されている。それに対して、『ティマイオス』では、統率力が行使されて宇宙と人間の身体が、魂との釣り合いの取れた関係をもって、いかに作られているかが示されている。大きく見て、『国家』は国家と個人とのパラレルな関係づけに基づく魂論、『ティマイオス』は人間と宇宙のパラレルな関係づけに基づく身体論であるとも言える。『国家』のムーシケーや哲学におけるテュポスやパラダイグマの働きは魂の形成において議論されているのに対して、『ティマイオス』の宇宙論でのコーラーの働きは、宇宙の魂よりは宇宙の身体にあたる万有の素材の秩序づけにおいて議論されている。このように、力点の置かれ方は異なっている。

しかし、身体面を強調する『ティマイオス』では、その身体に尺度(に適ったあり方)をもたらし方法を、ムーシケーや哲学を通じて魂にも応用すべきであると主張されていることをみた。また、逆に、魂の形成面を強調する『国家』では、ムーシケーによる教育論を振り返って、「ムーシケーと体育を最もうまく混ぜ合わせて、最も適宜な仕方(μετρίωτατα) [すなわち、最も尺度に適った仕方]これを魂に差し向ける人、そのような人をこそわれわれは、…最も完全な意味で音楽的教養のある人、よき調和を達成した人であると主張すれば、いちばん正しいことになるだろう」(412a)と述べられている。ムーシケーによる魂の形成と体育による身体形成とのあいだにも尺度の適った釣り合いの取れた関係があるべきだとされているのである。

『国家』から『ティマイオス』へと創造活動を導く一つのシステムが受け継がれていると言えよう。『ティマイオス』の宇宙論にはさまざまな要素を認めることができるであろうが、少なくとも、『国家』とのつながりをテュポスからコーラーへとつながる創造性に関わる議論の展開の道筋が通っていることを捉えることができるであろう。プラトンの後期思想の展開の中での『ティマイオス』における製作者の行為の位置づけは、さらに他の後期の諸対話篇『ピレポス』や『法律』などにおけるヌースや原因などの概念との比較考察が必要となるであろうが、それは今後の課題としていきたい。

- 1 『プロタゴラス』篇 322b や『法律』篇 676a-680e2
- 2 本稿におけるプラトンの訳文は岩波版全集の訳に依拠したが、少し変えた部分もある。
- 3 この原則を振り返っている箇所は、374a, 394e, 395b-c, 433a-d, 453b などである。
- 4 Annas, J., *An Introduction to Plato's Republic*, Clarendon Press, Oxford, 1981, pp. 74-75.
- 5 φαινόμενα (596e4), (599b5) などの語が使用されている。
- 6 この語の全般的な意味については、次の文献を参照。G. Roux, « Le sens de tupos », *Revue des Études anciennes*, 63, 1961.
- 7 次の拙論を参照。Sekimura, M., « Le statut du tupos dans la République de Platon », *Revue de Philosophie Ancienne*, 17, no.2, 1999, pp. 63-90.
- 8 『国家』 377a-b : 「どのような仕事 (ἔργον) なのだが、何であれ若くて柔らかいものを相手にする場合は、とくにそうなのではないかね? なぜなら、とりわけその時期にこそ形づくられる (πλάττεται) のだし、それぞれの者に捺そうと望むままの型 (τύπος) がつけられるからだ。」
- 9 『国家』 377c-d : 「物語というものはそれが大きくても小さくても、その型 (τύπος) は同じであるべきだし、同じ効力をもって (ταὐτὸν δύνασθαι) いなければならぬ。」
- 10 『国家』 378e-379a : 「アデイマントスよ、ぼくと君とは、目下のところ作家 (詩人) ではなくて国家の建設者なのだ。そして国家の建設者としては、作家たちがそれに従って物語をつくるべき、そしてそれにはずれた創作は許してはならないような、そういう規範 (τύπος) だ。」
- 11 このミーメーシスの主体の変換についてリュック・ブリソンは、ここでは語りや創造の問題ではなく倫理の問題とならぬ。ミーメーシスの問題化においてもテュポスなどの造形的な概念に依拠した展開となっている。Cf. Brisson, L., *Platon, les mots et les mythes*, F. Maspero, Paris, 1982, p. 92.
- 12 『国家』 396c-d : 「適正な性格の人 (μέτριος ἀνὴρ) は、[……] すぐれた人が過ちなく思慮深く行動しているところなら、とりわけ積極的に真似しようとし、他方しかし病や恋や酩酊によって、その他何らかの災難によってつまづいているのを真似る (μιμούμενος) のは、それほど積極的にでなく、より少ない機会にとどめるだろう。」
- 13 ここでは、μέτριος にはなれず、「より劣悪な人間たちの型に自分をほめこんで形づくる (εἰς τοὺς τῶν κακίωνων τύπους) ということを、嫌悪する」と、否定的観点から述べられているが、この μέτριος ἀνὴρ は優れた人を積極的に真似する(註7参照)のであるから、この積極的な真似は、「優れた人の型に自分をほめこんで形づくる」ことであると言えるであろう。
- 14 似像とテュポスとミーメーシスとの関係づけは、『クラテュロス』 432e においても別の観点から問題にされている。Cf. Soulez, A., *La grammaire philosophique chez Platon*, PUF, Paris, 1991, p.84.
- 15 『国家』 402b9-c8 : 「神々に誓って、音楽・文芸の場合もそれと同じように、われわれ自身にしても、われわれが国の守護者として教育しなければならぬと言っている者たちにしても、節制や勇気や自由闊達さや高邁さやすべてそれと類縁のもの、他方またそれと反対のもの実際の姿が、いろいろとくり返し現れるのをあらゆる場合に識別し、それらが内在しているあらゆるものの中に、その実際の姿をも似姿をも (αὐτὰ καὶ) するようにするまでは、そして小さなものの中にあろうと大きなものの中にあろうと、けっしてないがしろにせず、いずれを知るにも同一の技術と訓練を必要とするものだと考えるようになるまでは、われわれはけっして、音楽・文芸に習熟した者 (μουσικοί) となったとはいえないのではないだろうか?」

-
- 16 『饗宴』 204b : 「知は美しいものの1つであり、しかもエロースは美しいものに対する恋です。したがって、エロースは必然的に知を愛する者(哲学者)であり、知を愛する者であるがゆえに、必然的に、知ある者と無知なる者との中間にある者です。」
- 17 ピエール=マクシム・シュルは、テュボスがパラダイグマに近い意味を有することを示唆している。Schuhl, P.-M., *Platon et l'art de son temps*, PUF, Paris, 1952, pp. 18-19.
- 18 『ティマイオス』 50c-d : 「差し当たってのところでは、われわれは三つの種族を念頭に置かねばなりません。すなわち、「生成するもの」(τὸ μὲν γιγνώμενον)と、「生成するものが、それの中で生成するところの、当のもの」(τὸ δ' ἐν ᾧ γίγνεται)と、「生成するものが、それに似せられて生じる、そのもの(モデル)」(τὸ δ' ὅθεν ἀφομοιούμενον φύεται)と、つがそれです。なおまた、受け容れるものを母に(μητρί), 似せられるものものを父に、前二者の間のものを子になぞらえるのが適当でしょう。」
- 19 Platon, *Timée/Critias*, traduction, introduction, notes par L. Brisson, GF-Flammarion, Paris, 1996, p. 249.